



2026年6月10～11日に函館水産試験場試験調査船「金星丸」で実施した噴火湾周辺海域の水温・塩分・潮流の観測結果をお知らせします。
QRコードからもアクセスできます→

- ・湾内外の表層水温は平年並，湾内の水深20-30m層では1~4℃程度高い
- ・湾内海底付近の溶存酸素は前年同時期と比べ低い
- ・2026年夏季の噴火湾における表層水温は平年よりも高くなる見通し

【水温の鉛直分布】

噴火湾周辺の表層水温は11~12℃台，前年同時期より低く平年並でした（図1）。湾内の水深20-30m層では平年と比べ1~4℃程度高く，湾外の胆振側（St.05）では全層で平年の水温を上回りました。

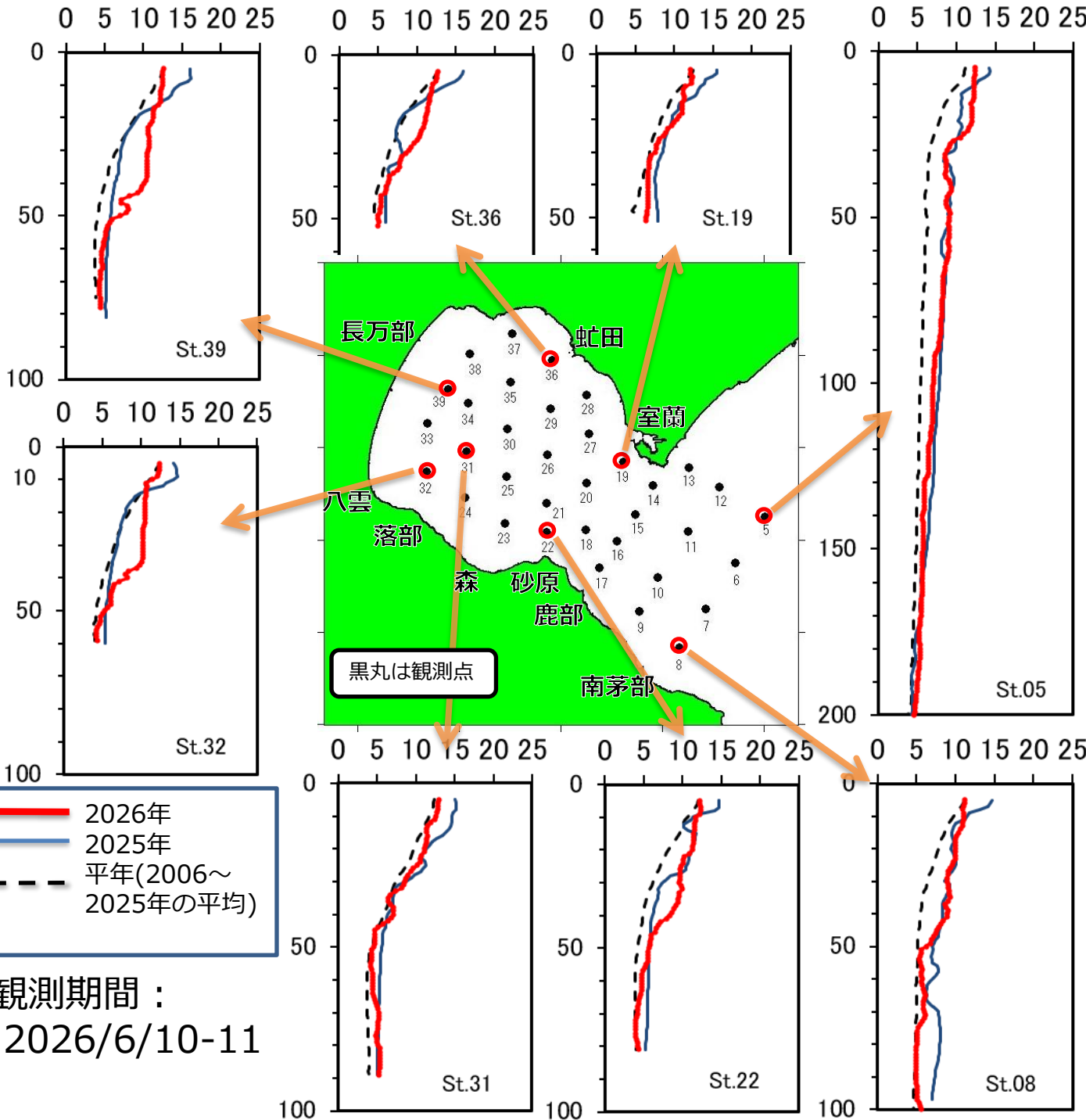


図1 噴火湾各地先の水温の鉛直分布

【水温，塩分，流向流速の水平分布】

■水温・塩分（水深20m）

湾奥で水温11℃以上，塩分32.4以下と，周囲と比べて高温・低塩分な水が分布していました（図2AB）。また，湾外は水温11℃前後，塩分33.0以下で前年同時期に見られた暖流系水（塩分33.6以上）は見られませんでした。

■流向流速（水深13m）

湾内で時計回りの渦が，湾口部では湾外に向けた流れが見られました（図2C）。

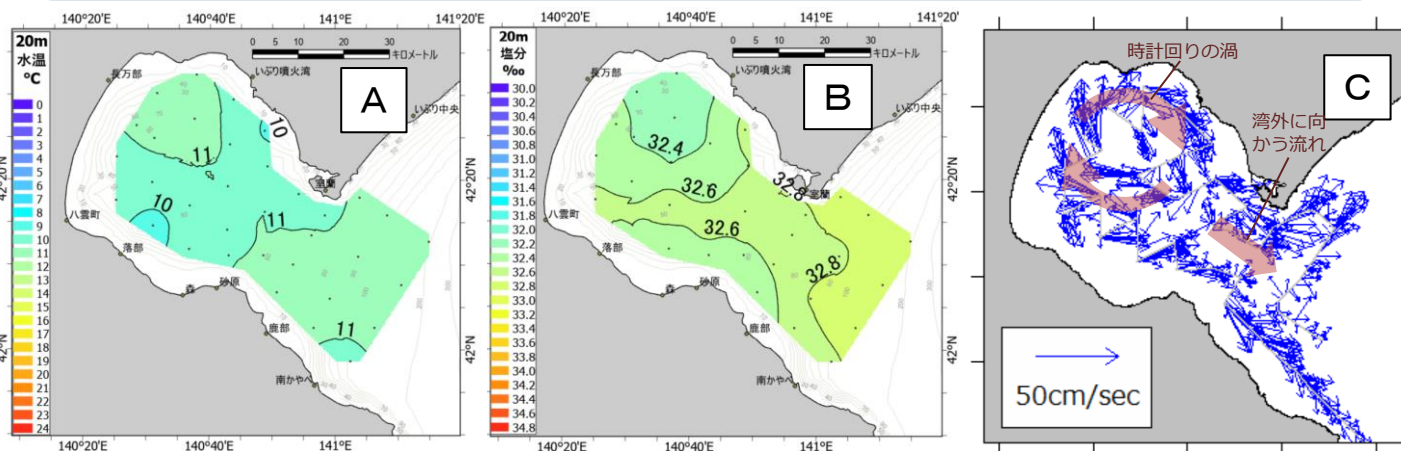


図2 A:水温（深度20m），B:塩分（深度20m），C:流向流速（深度13m）

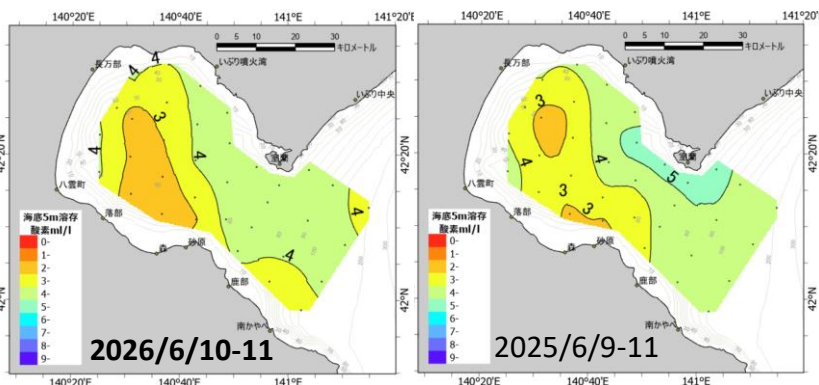


図3 海底上5mの溶存酸素 左:今回の調査，右:前年同時期

【溶存酸素の水平分布】

海底上5mの溶存酸素は湾内の広い範囲で3ml/Lを下回っています（図3左）。5月や前年同時期（図3右）と比べても低い値になっています。

【水温，塩分，溶存酸素，密度の鉛直断面】

2026年6月の湾内表層付近の水温は12℃前後，塩分は32.4以下となっています（図4A・B）。5月と比べて湾内表層で高温・低塩化し，密度も低下しています（図4D）。溶存酸素は湾奥の水深80m付近で3ml/Lを下回っています（図4C）。

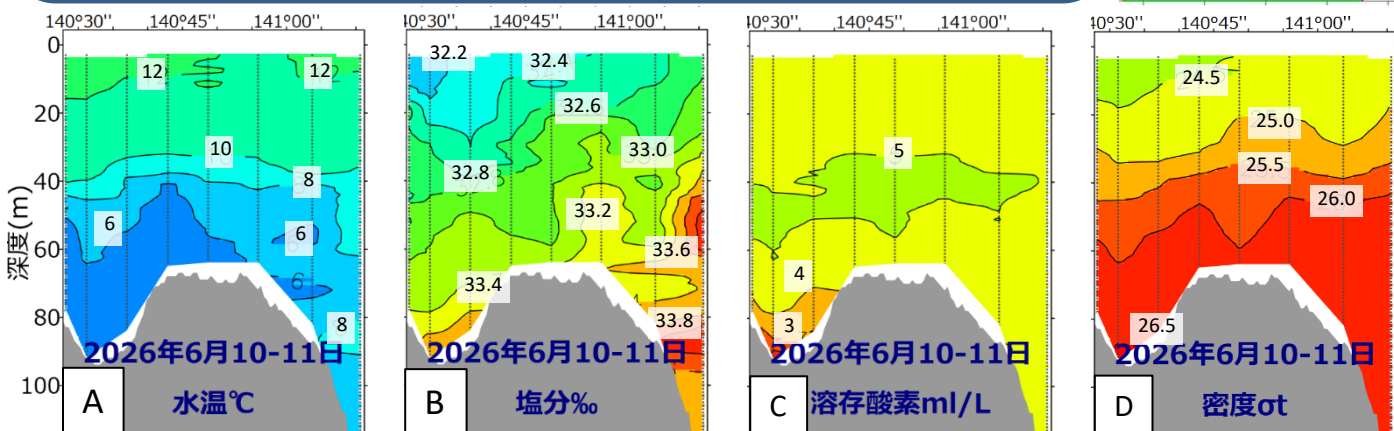
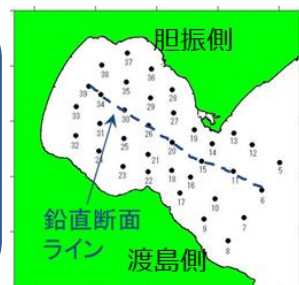


図4 A:水温，B:塩分，C:溶存酸素，D:密度 ※地図にある鉛直断面ラインを渡島側から見た図です P2

【湾央における6月水温の経年推移と今後の見通し】

■湾央St31における水温（水深10・20・30m）

湾央定点における2026年6月の水深10・20・30mにおける水温は前年同時期と比べ低かったものの、2006年以降の平均と比べて高い水温となっていました（図5）。

■今後の見通し（参考：気象庁の季節予報）

夏季の噴火湾は大気による加熱が継続することによって表層の水温が上昇します。気象庁の3か月予報（図6；2026年5月19日発表）によると2026年の6～8月は北日本で平均気温が平年より高くなる確率が高いと予測されているため、**2026年夏季の噴火湾表層は平年よりも高水温となる可能性が高い**と考えられます。

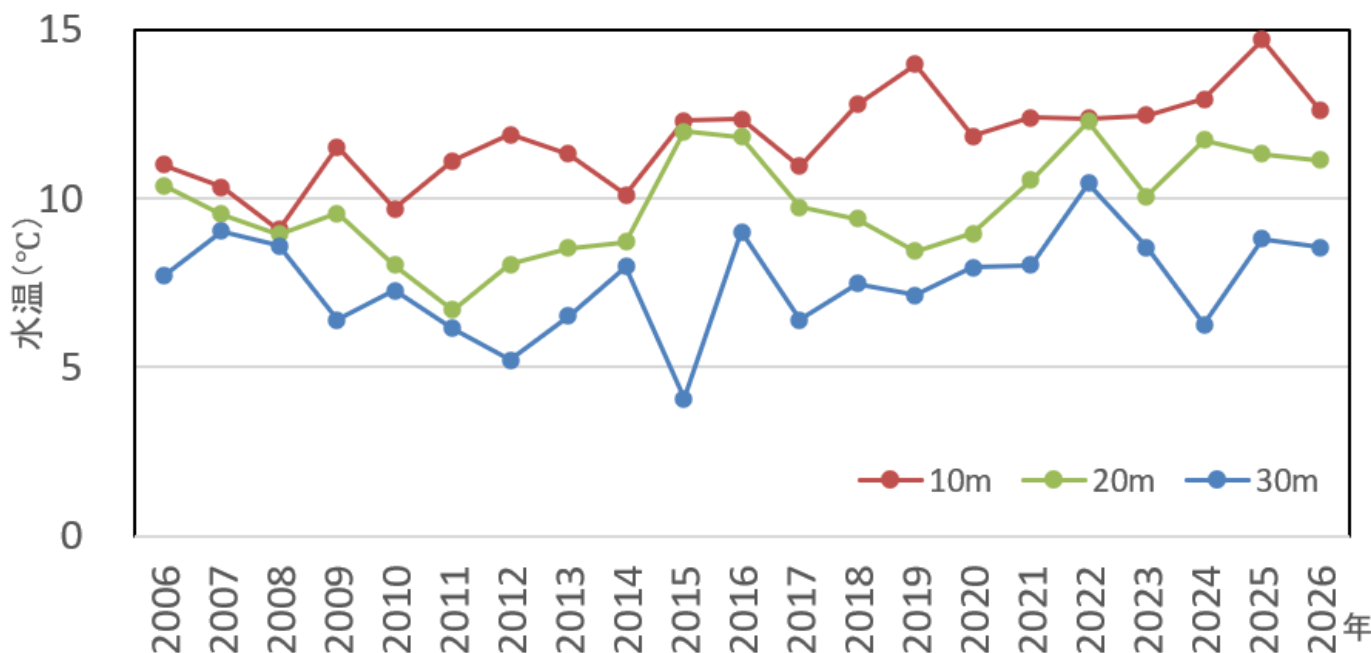


図5 湾央St31における6月水温の年推移（赤：10m・緑：20m・青：30m）

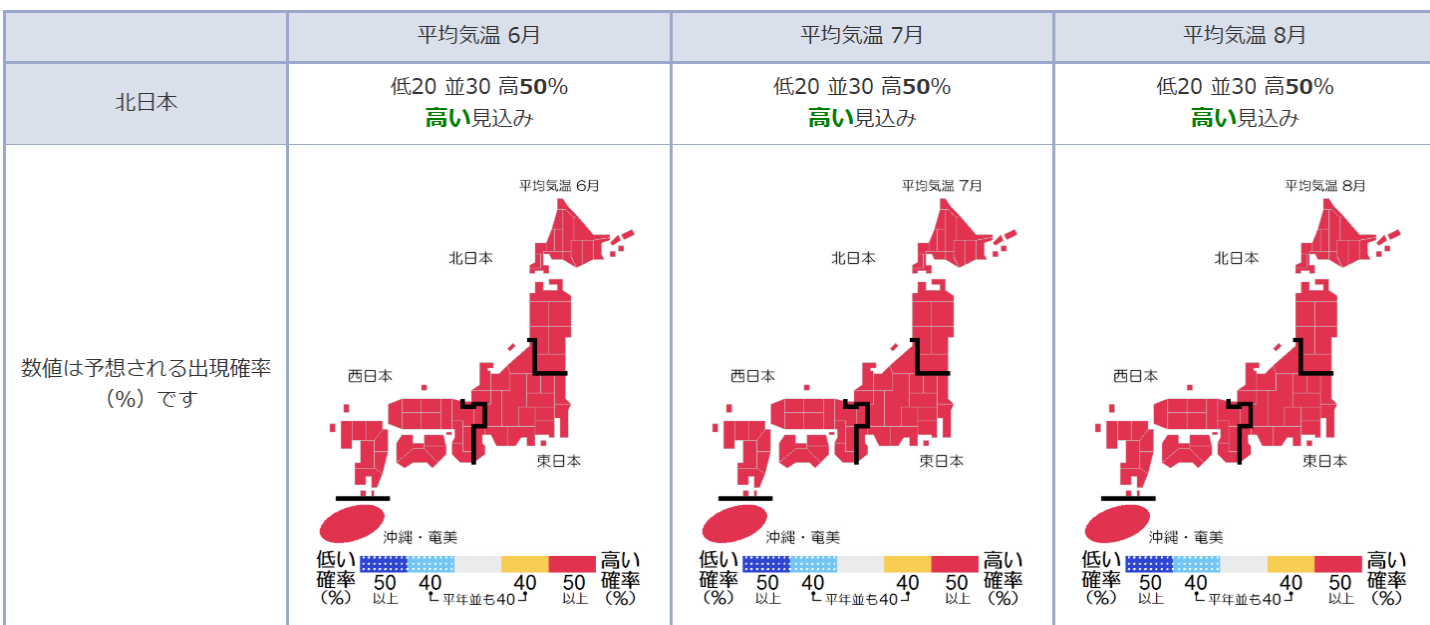


図6 2026年夏（6～8月）の予報（気象庁HP2026年6月12日閲覧；北日本を抜粋）